⑩橘樹(たちばな)の史蹟を訪れる

2019.10.9 秋山

野川神明社

昭和 54 年(1979)、野川神明社境内に野川町内会館を建てる為、敷地内を発掘調査したところ、今から約 1800 年前（弥生時代後期）の墓地があることが分かりました。この墓は遺体を納めた穴を中心に周りを巾 1m 前後の溝で方形に囲ってつくられていることから「方形周溝墓」と呼ばれています。

野川神明社の北には影向寺(ようこうじ)遺跡、千年伊勢山台(ちとせいせやまだい)遺跡などの弥生時代の大きな集落が発見されています、ここで生活していた人びとは死後、野川神明社境内の墓地遺跡に葬むられたのかもしれません。

影向寺（ようこうじ）　（7 世紀末　飛鳥時代）

野川のバス停から坂を登り、野川神明社を過ぎた丘の上に、1000 年もの昔、ここにきらびやかな三重の塔や本堂があって、奈良の薬師寺と同じくらい立派な寺があったのだと、いくら聞かされても本当だと思えません。それはどこでも見られる普通の寺となんの変わりもないからです。

影向石（ようこういし）　境内に入ると少し離れた右側に大きな石が、ずしりと横たわっています。長い年月雨風にさらされたため、すっかり艶を失いざらざらしています。長さ 180cm、巾 140cm、高さ 80cm もある大きな石で、真ん中には直径 20cm、深さ 15cm の穴があいています。

この大きな石は昔あった三重の塔の土台で、太い柱を切り込んで、すっぽりとはめ込み、支えていたものと考えられています。このような大きな土台石を影向石（ようこうせき）と呼んでいます。

布目の瓦（ぬのめ）　影向寺の境内や付近から出土した瓦は、布目瓦と呼ばれています。この瓦はうらに麻の布目の跡が、はっきり見られます。これは天平時代（奈良時代）が最も多く、天平瓦ともいわれていす。この瓦は、一枚の重さが 4 kg といわれていますから、ずいぶん重い瓦屋根となり、こうした重い屋根を支えるためには、太い丸い柱が必要になってきます。大きな土台石（影向石）もこれらの太い柱をがっちり受け止めていちのです。

たちばな古代の丘陵地

奈良時代の遺跡橘樹郡衛（たちばなぐんが）の推定地の一部で、広さは約 1650 ㎡。橘樹郡衛は奈良時代から平安時代初期の武蔵国橘樹郡の役所で、その行政区域は多摩川の右岸下流と鶴見川下流部に挟まれた現在の川崎市域と横浜市北東部であると考えられています。近くには 7 世紀後半に創建され当時の郡衛と密接な関係をもつ川崎市内最古の影向寺があります

國史蹟 **橘樹官衛遺跡群**（たちばなかんがいせきぐん）

武蔵国橘樹郡の役所跡である橘樹郡家の跡と、その西側に隣接して造営された古代の寺院跡である影向寺遺跡から構成された古代官衛の遺跡です。

橘樹官衛遺跡群は、地方官衛の成立から廃絶にいたるまでの経過をたどることのできる貴重な遺跡で、その成立の背景や構造の変化が分かり、 7 世紀から 10 世紀の官衛の実態とその推移を知るうえで重要であるとして、平成 27 年川崎市初の国史跡に指定されました。

橘樹郡家（郡衛）跡（千年伊勢山台遺跡ちとせいせやまだい）

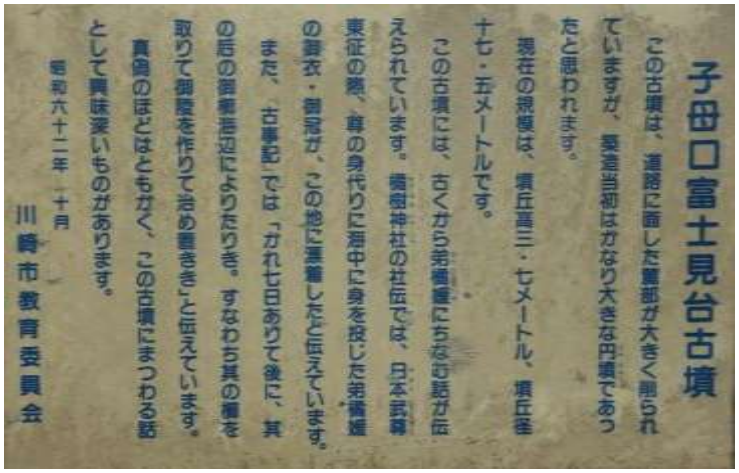
千年伊勢山台といわれる東西にのびる標高 40～42m の平坦な台地に位置しています。平成 10 年から 19 年にかけて行われた橘樹郡衛推定確認調査の過程で発見された地方官衛の倉庫群です。

郡家（ぐうけ）とは、古代の律令制度下でおかれた郡において、郡司以下の官人が政務をとった役所のことです。（考古学上の用語としては、郡家のことを官衛と呼ぶこともあります）。郡家には、群庁・正倉（しょうそう）・館（たち）・厨家（くりや）などが設けられました。このうち、郡庁は郡の政務をとる庁舎、正倉は税として納められた頴稲（えいとう＝穂首刈りをした稲穂）などを納める倉庫群で、

溝や塀で区画された場合は正倉院とよびます。館は宿泊施設、厨家は郡家で行われる給食や饗宴のための厨房で、その他に手工業生産のための工房や祭祀場などがおかれました。

橘樹郡家跡も、このような施設からなっていると考えられますが、現在のところ確実に判明している施設は、租税を納める倉庫が並んでいた正倉院のみです。橘樹郡家跡では、最も広い部分で東西約 210m、南北約 160m を区画する溝の一部が確認されています。また正倉院の西側には、さらに郡家に関連すると考えられる大型建築物が広がっていることが分かってきました。

富士見台古墳



橘樹神社の裏手の丘にあり、6 世紀頃に造られた古墳で当時の有力者の墓であるといわれています。富士見台古墳は江戸時代まで旧子母口村の一角でしたが、近年になり都市化が進むと、川崎市は古墳周辺に宅地を造成し、地名も「子母口富士見台」と改められました。

かっては多摩川沿岸の田園風景の中にそびえる丘であった富士見台は、現在は宅地造成や道路建設により削られ、古墳頂上部の一部、高さ 3.7m、直径 17.5m の部分のみが姿をとどめています。頂上から見える風景も宅地ばかりです。

橘樹神社

子母口にある神社。日本武尊、弟橘媛（おとたちばなひめ）を祀る。近隣に橘樹郡衛が置かれていたと推定される地域があることから、かつて橘樹郡の総社があったと考えられています。社伝によると「大和武尊が東征の際、海が荒れ、弟橘媛はその身を投げ海を鎮めました。やがて入水した弟橘媛の着衣・御冠の具だけがこの地に流れ着きました」とあります。

子母口貝塚

多摩丘陵の標高25m前後の台地上にある貝塚で縄文時代早期後半、約 7000 年前のもので、多摩丘陵上で最も古い貝塚です。この貝塚が知られているもう一つは、土器の粘土の中に草などの繊維を入れ、また表面に貝殻で引いた線や竹などにまいた縄を押し付けた文様がある子母口土器です。

子母口貝塚は東西約 100m、南北約 150m の範囲にある 5 つの貝塚を総称したものです。浅い海の砂の中にいるマガキが半分以上をしめ、ヤマトシジミやハイガイに混じ

って、スズキやクロダイなどの魚骨やイノシシなどの獣骨も見つかっています。子母口貝塚がつくられたころから、縄文時代前期は気候が今よりも暖かく、海が千年（ちとせ）あたりまできていました。これを縄文海進といい、川崎に沢山の貝塚がつくられました。当時、子母口貝塚の眼下には砂浜が広がっていたのです。

子母口という地名の由来

「中世には渋口と書かれ、近世初期から子母口と書かれるようになった」といわれています。地名の由来は不明で、幾つかの説があります。

① シボクチ説　シボは**しぼむ**という地形を表し、矢口川の谷の入口ということで「シボクチ」と呼ぶ

② シブクチ説　シボをシブ＝渋という意見で、その渋水が谷間から広大な多摩川低地に出る口、即ちシブクチ＝渋口、それが後にシボクチに訛った。

③ シオクチ説　海水の潮の口＝シオクチがもとである。

④ 神木地説　橘樹神社の御神木に巨大な松樹があり、それによりこの村を神木地（シンボクチ）村といい、後に音が縮まり表記が変わり子母口となった。

伊藤家長屋門

子母口の豪農だった伊藤家は鎌倉時代からの旗本高林家が当地の領主だった江戸中期まで、郷代官を務めていました。また母屋も代官屋敷の格式がのこる建物でしたが、昭和 39 年に現代風に建て替えられました。今はこの長屋門だけが代官として当地を支配していた伊藤家の歴史を伝えています。

参考資料

川崎市史　通史編　　川崎市役所
橘樹郡家と影向寺　　川崎市文化財団
川崎の地名　　日本地名研究所
現地の説明板